

愛と
おそれと

佐多
稲子



isa

愛とおそれと

佐多稲子

昭和55年2月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Ineko Sata 1980

Printed in Japan

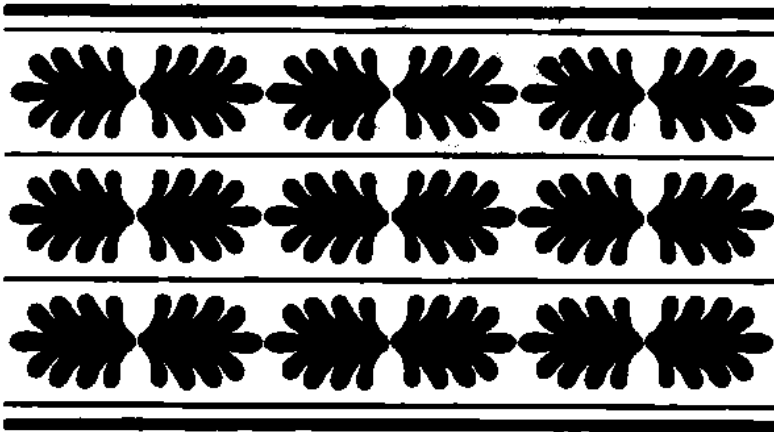
0193-316123-2253 (0) 380円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

庫

愛とおそれと

佐多稲子



講談社

目次

愛とおそれと

解説
年譜

小林裕子

二四〇

二五三

七

愛とおそれと

寒い風が吹いて、駅前からつづいている商店の軒並みに立てた笹が音を立ててゆれていた。師走も押しこめ、商店は店先きいっぱいかざり立てているが、もう時間も九時だったし、寒い風の故もあって、店の灯ばかりまだあかあかとして、アスファルトの広い道がずっと見渡せる。

恵子は赤や青や黄の格子縞になったショールを頭からかぶり、オウバーの襟を立てる。風に抵抗するように肩先きを前へだす恰好で急いでいた。勤め先きの神田の洋品卸店から、商品について、日本橋のある百貨店に出張している店員だから、百貨店が閉まってからも自分の店へ一度帰って、その日のあと始末や、明日の仕度などでおそくなるのであった。

ああおなかが空いた、とおもう。弟の良一が夕飯の仕度はしておいてくれる筈だが、父の順助ももう帰っているだろう。女の自分が帰りがおそくて、夕飯の仕度ができないので、彼女はいつもそれが父や弟に悪いような気がしているのだが、今夜はとにかく、弟が仕度をしておいてくれる夕食のお膳につくのがたのしみだった。

高田馬場駅から少しのぼりになった大通りを歩いてきて、恵子は、ふとん屋のウィンドをのぞいている父を見つけた。恵子は足を早めたが、近づくとも今度はしのび足になり、父のうしろに

立って、

「わアッ」

と、おどした。

父の順助は、はっとしたように振り返って、

「何だ。恵子か」

「お父さん、何を見てるの」

「うん」

いつになく、あいまいに言葉をにごして、

「寒かったろう」

「寒いわね。お父さん、お風呂のかえり？　良ちゃん、うちにいるの」

「あ、いるよ」

「今日、何のおかず」

手拭を持った順助と連れ立って、横町へ曲がってゆきながら、恵子は早速聞いた。

「腹が空いたんだろう。湯豆腐だ」

「湯豆腐か。いいわ、あったかいものもいいわ」

下り坂になった狭い道の途中のちんまりした二階家だった。小学生のときから、ここに住んでいて、空襲で焼けたが、土地を借りていたから、順助が苦勞して建てた。その苦勞の果てに、恵子たちの母親は病死をして、恵子たちにとっては、おもいも深い家なのである。

「ただ今」

と、格子をあけると、すぐそばの三疊で勉強をしていた弟の良一が顔だけ向けて、

「おかえんなさい」

と、この頃太くなった声で答えた。

茶の間には夕食のお膳が出たまま、ふきんがかけてある。

「良ちゃんお世話さま」

「ああ、何でもそこにあるだろう」

「うん大丈夫よ」

恵子が膳の前に坐ると、順助は、台所に手拭をかけてきて、あごのあたりを撫でながら、

「恵子、クリームをくれないか」

「私の鏡台の上にあるでしょ」

「これだね」

順助はあぶなっかしいような手つきで、恵子のクリームのびんから、指先きに少し取って、あごへこすりつけながら、火鉢のそばにやってきた。

「暮で店は忙しいだろう」

「私、タオルの売場でしょ。だもんだから、お歳暮の注文で大変。神田へ帰ってから箱づめや何かあって、くたくただわ」

云いながらも、恵子はえくぼのできる頬に風に吹かれてきた紅味をのぼせて元氣そうに笑った。

順助は恵子のそのはしこそような笑顔に、ふと亡妻の若い時のおもかげを見出す。というのも、

今日の同僚からの話のせいにちがいない。恵子たちの母親が子宮がんで亡くなって、もう丸四年経つ。その後は順助の老母が静岡の郷里から上京して世話をしてくれたが、恵子が高校を卒業したとき、丁度郷里の長兄がまた死亡して、そっちへ帰って行った。再婚をすすめる話にも、順助は、もう子どもも大きいからと云ってことわつてきた。二人の子どもが丁度感じ易い年齢だということが、順助の配慮にあつたし、亡くなった妻へのおもいもあつて、順助はその気にならないのでもあつた。

が、この頃から同僚の吉田の話で、順助も考えることがあつたのだ。

「恵子ちゃんだって、もう年頃だろう。嫁にもやらなきゃならないよ。君がひとりじゃ恵子ちゃんだって家を出にくいだろうし、君だって淋しいよ。よく世間にある話だけど、女房を亡くした父親が娘を嫁にやりたがらないで、婚期をおくらせてしまうということもあるからな」

そういわれたとき、ああなるほど、と順助は心のうちでうなずいた。順助は、その世間話の、娘の婚期をおくらせる男親の感情というものにおもい当るふしもあるのだ。恵子のお化粧が上手になると、それが何故かいらいらして、おもわずひどい言葉を投げつけて、恵子を泣かせたこともある。恵子が鏡台の前から、歌を口ずさみながら立ち上るのを横目に見ていて、彼は苦々しい顔をしたのだ。

「なんだ、お前の口の色は、パンパンと間ちがえられるぞ」

「あら、そうお」

そのとき恵子は、どきつとしたようにもいちど鏡をのぞきこんだ。その仕草がまた気にさわつた。

「鏡ばかり見るな。顔だけつくったって、美しさというものは出やしないのだ。美しさというものは人間の修養からおのおのずと出てこそ美しいものなのだ。お前たち若いうちは、鼻の先きばかりたたけばいいかとおもっているんだらう」

「だって、そりやそうだとおもっているわ」

「そんなら、紅なんかやめてしまえ。何だその口の色は。もの欲しそうに」

「ひどいこというのね」
恵子はそうつぶやいて、台所へ立つて行つた。あきらかに泣きに入つたのだ。もの欲しそうになどといったのを、順助もいったとたんに後悔していたが、尚もむつかしい表情ですばっすばつと煙草をのんでいた。

今夜順助は、銭湯の帰りに、ふとん屋のウィンドをのぞいていて恵子に見つけられたとき、てれた。恵子は何も気づかなかつたらしいが、もし再婚するとなれば、という気があつて、わが家のゆきとどかないふとんをおもい出したのである。

順助はしかし今夜やはり氣持を押えかねていた。一度火鉢の前に坐つたが、また立つて自分で台所へゆき、またもどつて来たとき、冷酒をついだコップを手にしていた。

「あら、お父さん、今夜のまなかつたの」

湯豆腐で食事をしている恵子がそれを見てすぐ言葉をかけた。半ばとがめる調子になつてゐる。

「う、うん」

順助は返事をはぐらかした。少年工からたたき上げたエンジニアの彼は、色の黒い緊つた頬を

している。その男らしい顔が、娘にとがめられてはにかんだ。

「お前たちに今日はちよつと話があるんだがねえ」

「あら、そうお」

「良一、良一もちよつと来ないか」

「なに、お父さん」

父親似の良一は畳の上においた椅子から身体をまわした。

「ま、こつちへ来いよ」

良一は椅子から立って来ると、お膳の上のたくわんを一切れつまんでそれから坐った。

年が明けて二日になった。恵子たちの家でもとにかく雑煮を祝って、元旦は順助も年始まわりに出かけたが、いよいよ今日二日は、前橋まで行く日だった。

「お父さん、手拭と歯ブラシだけでいいわね」

「ああいいともいいとも。一晩泊りだから」

順助は恐縮したようにいって、ひとりで背広の腕をおしている。

「いい人だといいわね」

「さ、どうだかね。ま、一日、伊香保の温泉でゆっくりしてくるつもりでゆくさ」

良一も、父親がはにかんでいると見抜いて、

「お父さん、おみやげ買ってきて」

と、大きななりをした高校生がそんなことを云った。

「みやげか。珍しいものもないだろう」

順助が真に受ける。恵子がおかしがって、

「うそよ、お父さん、良ちゃん、ふざけてるのよ」

「あ、そうか」

「あ、そうか、だって」

ころころと恵子が笑う。

「いや、なにか買ってくるよ」

順助はすっかりまごまごしているみたいだ。

「じゃ、行って来ます」

「いってらっしゃい」

大きな子どもたちにおくられて順助は家を出た。今度の話を持ってきた同僚の吉田と落ち合つて、吉田の郷里である前橋まで、縁談の相手に順助は逢いにゆくのである。恵子は門口に立つて、その父親のうしろ姿を見ていた。順助はうつむきがちに横町を曲がって行つた。

恵子は家の中へ入ると、

「父の見合い、か」

と、云つた。何か小説の題でもよむように。

「お父さん、てれてたね」

「良ちゃんが冷やかすからよ」

「なんて？」

「あんた、さっき、せっかくお父さんが頭とかしているのに、薄くなったね、なんて云うんだもの」

「だって事実だからさ」

恵子は父親の脱ぎ捨てた着物をたたみながら、

「それにお父さん、少し猫背になったみたいよ。今、うしろ姿見ていてそうおもった」

「それでもやっぱり結婚する気になるのかなア」

「そりゃそうよ。いくつになったって、結婚すればいいじゃないの。お母さんが亡くなって、すぐ結婚したって、しかたがなかったのよ。今までお父さんよく独りでいたわ」

「そうかね。どういう女が来るんだろう」

「わかんないわ。でも私は、お父さんが早く結婚してくれた方がいいの。ときどきお父さん不機嫌になるでしょう、あんなとき、私、お父さんの御機嫌とるのいやなもの」

「薄情なんだな、姉さんは」

「そういうわけじゃないわ。お父さんだって、あんなとき淋しいんだとおもうのよ。だから私が御機嫌とったってしょうがないみたいじゃないの。私、そうだとおもうの。だからやっぱりお嫁さんもらった方がいいのよ」

「お嫁さん？　だってもうその人だっていい齢なんだろう」

「意味は同じじゃない」

「ちがねえや」

「いやね、そんな言葉つかって。もし新しいお母さんが来たら、そんな言葉つかうと、不良かと

おもわれてよ」

「そんなこと知るかい」

「あんた、いやに反抗的ね。お父さんの結婚に、あんただって賛成したじゃないの。あんただって、もう大人でしょう」

「そりやそうだよ。今だって認めてるよ。ただ何となくさ」

良一は置炬燵に寝そべって、腕枕の顔を天井に向けていた。

「あんた今日出かけるんじゃないの。私、出かけてよ」

「うん、出かけるよ」

そう云ったまま、まだ天井を見ていた。

恵子は台所を片づけながら独り言みたいに、

「人のことは云えないわ。どこもかしこもきたない、なんていやな目されると参るな」

ごしごしとたわしで流しを洗った。祖母が郷里へ帰ってからは、恵子が何といっても主婦の役目をしなければならぬので、そんなことも気がつくが、ゆきとどいていないのは当り前だった。祖母の真似をして、廃物も捨てないつもりで、空の折箱だの、わさび漬の木皿だの、いろんなものが棚にのっている。

順助が自分の縁談を打ち明けたとき、恵子はすぐのり気を示したし、年齢が三十二歳、と聞くと、良一はちよっと戸まどう表情をして、

「お父さんと、十二もとしがちがうの」

と云った。順助はその息子の言葉に、視線のやり場に迷うような顔をした。